大学スポーツにおける学修支援とキャリア支援
―スポーツ留学生に着目して―

池　田　智　美*

要　旨

本稿では，スポーツ留学生のライフストーリーを分析し，進路選択や学修への動機づけについて考察を行った。その結果，どのような動機づけがみられ，それらがどのように複雑に結びついているかが明らかになった。また，経験を通した他者との相互作用の過程において，アイデンティティを形成させ，自己実現への動機づけとして成長させていることもわかった。

キーワード：進路選択，動機づけ，ライフストーリー，アイデンティティ，自己実現

1. はじめに

2020 年の東京オリンピック開催が決定し，近年，国内でスポーツの機運が高まっている。また，2015 年にはスポーツ庁が設置され，高等教育機関においても，大学スポーツの振興に向けた実態調査や基本方針の議論が進んでいる。日本の競技力向上のために，外国人留学生をスポーツ推薦入試などによって受け入れる大学も増加している。学術的背景としては，近年，スポーツ分野における国際貢献とビジネスを扱った研究や，体育授業において必要な配慮など，グローバル化や社会的マイノリティとスポーツ分野を結び付けた研究が盛んである。加えて，大学期の課外活動と人間的成長や，スポーツキャリア形成過程を調査する研究も行われている。しかし，日本国内における高等教育機関に所属するスポーツ留学生を対象とした研究は，非常に少なく，その現状は明らかになっていない。

ここでいうスポーツ留学生とは，「スポーツ選手としての留学，または競技向上や，そのための練習活動を行うことを主目的として，日本に滞在している外国籍留学生」（松元・高橋 , 2009, p217）を指している。本稿では，彼らスポーツ留学生の実態を把握し，その支援の在り方を明らかにするための基礎研究として，スポーツ留学生のライフストーリーを考察する。

2. 先行研究

大学スポーツが抱える課題についての調査（スポーツ庁，2017a）によると，「学業との両立」に課題を抱えている学生は 63.9％（2 位）であり，また，伊東（2015）の調査では，学修支援について

* 京都産業大学全学共通教育センター

約70％の大学がその必要性を感じていることを指摘している。スポーツ留学生受入れの課題を提示した松元・高橋（2009）によれば，大学入学時点で日本語学習歴の全くない者は，52.4％にも上っている。そのため，スポーツ留学生は，日本人スポーツ学生以上に学修支援を必要としていると推測される。

木下（1975）はスポーツ特待生の現状について調査し，授業よりも部活動優先が常識であったり，授業への出席なしに単位取得できるなどの「部活動のための便宜供与」を問題視している。また，松元･高橋（2009）は，スポーツ留学生受入れの課題として，大学が，彼らに競技強化のための助っ人，大学の広告塔としての役割を期待する点を挙げている。これは，スポーツ留学生には特に傾向が強いと思われる。大学がスポーツ留学生への配慮と捉えている支援，例えば，授業を欠席した場合の配慮が，卒業のための単なる出席免除であるなら，それは学修支援とは言えないだろう。大学スポーツにおいて，このような学修支援の課題があるにも関わらず，特に，スポーツ留学生への支援については，解決を試みた研究は管見の限り見当たらない。

言語教育の面からスポーツ留学生の実態について考察した研究としては，三代（2014a）がある。日本の大学にスポーツ推薦として入学し，サッカー部に所属している韓国人スポーツ留学生１名を対象に研究したものである。研究方法としてライフストーリーを取り上げ，教師側と留学生本人との間に，日本語学習の必要性について大きな差があることを指摘する。三代は，学習者のアイデンティティ交渉の中で意味を持たない学習は，学習者に拒絶され，教育を行ったとしても期待される効果は望まれないことを明らかにした。その上で，日本語教師に求められることは，学生と共に必要な学習を構築する役割であり，個々に合わせて柔軟に学習を支援することだと主張している。しかし，三代（2014a）では，スポーツ留学生にとってどのような日本語教育が必要かという点に関しては示唆しているが，何が学習意欲の向上へつながる要因になるかという点は解明されていない。

また，三代（2014b）では，サッカー部と柔道部に所属する韓国人スポーツ留学生２名を対象として，日本語学習を「投資」という概念を用いて考察している。日本語学習への意欲の有無は，個人の性格や学習能力によるものではなく，「投資」としてセカンドキャリアにつながる文化資本の獲得に自覚的かどうかであると指摘する。さらに，この文化資本の重要性を教師とスポーツ留学生とが共有することが支援には必要であり，「第三の他者」として学びを促し，コミュニティの外へ目を向けるための出会いを作ることが日本語教師の役割であると述べている。

青石，佐々木（2010）は，企業に所属するラグビー部のトップアスリートを対象に，そのキャリア志向の実態と問題点を明らかにしている。アスリートの進路選択やキャリア志向には「重要な他者」が強い影響を及ぼしており，この「重要な他者」とは既に企業に所属している大学の先輩や，選手を企業に送り込む大学の指導者，ラグビー部のOBであるという。選手のセカンドキャリア形成に対する動機づけには，「重要な他者」である彼らが，キャリアチェンジについての事前教育や啓蒙，サポートをすることが必要であると結論付ける。

留学生の動機づけと行動の実情に注目し，進路決定に至るプロセスを研究したものには，久野（2015,

2018）がある。久野は就職支援に重点を置き，留学というトランジションにおける成長の過程をそのライフストーリーから考察している。進路決定の要因は複雑で重層的なものであるが，特に重要なのは「知人の助言に対する考察と分析」などの内省のための能力を向上させることであると明らかにした。また，「将来的なモデル」や「身近なモデル」，「家族に対する感謝の気持ち」が成長と進路選択の要因につながると示唆する。

三代（2014b）は「投資」という概念を用いて，日本語教育の側面から，言語学習の動機づけの要因とスポーツ留学生への学修支援にどのようなことが必要かを明らかにした。しかし，三代（2014b）での対象者 2 名はどちらも自国の高校を卒業し，進学時から，日本の大学への進学をセカンドキャリアのための投資として捉えていたが，スポーツ留学生は，彼らのように大学への進路選択時に既にセカンドキャリアを明確に意識し勉学に強い気持ちを持っているとは限らないのではないかと思われる。

また，青石 , 佐々木（2010）および久野（2015, 2018）は，キャリア支援として，進路選択に影響を及ぼす要因に言及しているが，どちらもスポーツ留学生を対象とした研究ではない。

大学はスポーツ学生に競技力向上，学修支援と同時に，キャリア形成支援を行うことが重要であり（スポーツ庁 , 2017b, p13），それは学習動機を内面から支える点でも必要である。スポーツ留学生にとって，言語学習は長期的な継続が必要であり，その場合特に，動機づけが重要になってくる。そこで，本稿では，スポーツ留学生への学修支援とキャリア支援の在り方を明らかにするための基礎研究として，彼らの進路選択における動機づけについて考察し，スポーツ留学生の実態を把握することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究の目的はスポーツ留学生の進路選択における動機づけについて考察し，その実態を把握することである。そこで，主観的なものを明らかにしようとするライフストーリー研究法を用いて質的に分析する。桜井（2002）は，ライフストーリーは「個人が歩んできた自分の人生についての個人の語るストーリー」（桜井 2002, p60）であり，「価値観や動機によって意味構成されたきわめて主観的なリアリティである」（桜井 2002, p39-40）としている。ライフストーリー研究法の利点として，語り手個人の主観的現実を明らかにし，どのように出来事や経験が関連しているのか，また，語り手がその動機や意味をどのように理解しているのかを解釈できる点がある。また，質的研究法が立脚している考え方には，それぞれの経験の中にある意味を明らかにするという視点があり，量的研究では見られない内実を考察することが可能である。したがって, 本研究では, ライフストーリーインタビューの分析を通して考察する。

調査は，日本国内の大学に在籍するスポーツ留学生 A，1 名を対象にインタビューを行った。A は，ニュージーランド出身のスポーツ留学生で，日本には高校から留学している。筆者と A との関係は，筆者は日本語教員であり，A は筆者の授業を過去に履修していた学生である。A は勉学や進路に対し

て心配だと筆者によく話しており，接触の機会も多く，両者の間に一定のラポールが形成されていたといえる。

調査協力者として彼のライフストーリーに焦点を当て検討する理由は，彼がスポーツを目的に来日し，将来のセカンドキャリアについては自覚しているわけではないが，勉学への意欲が低かった時期を経て，意欲的に勉学に取り組むような変化がみられてきたと筆者が感じたからである。青石，佐々木（2010）や三代（2014b）がその必要性を指摘するような，スポーツ選手としてではないキャリアチェンジへの意識を持っているとはいえない彼にとって，どのような動機づけが進路選択あるいは学修への意欲へつながっているのかが興味深く，考察対象としたいと考えた。

研究の構えとしては，スポーツ留学生はスポーツ推薦で入学しており，スポーツをすること，将来はプロになることを目的に留学しているのであるから，勉学への意欲は高くないだろうという考えがあった。また，日本の高校を卒業して大学に来ているのであるから，大学の授業を日本語で理解するための学習言語能力は十分習得されていないかもしれないが，日常生活に必要な生活言語能力は既に身に付いており，本人も自分の日本語能力は十分だと自覚しているなら学習の必要性を感じていないのではないか，そのために学習意欲も低いのではないかと考えていた。筆者がこうした構えを持つ背景には，これまでAが単位を落とす傾向にあったこと，所属している部や学部の日本人学生とはコミュニケーションに問題がなく良好な人間関係を築いているように見られたことなどがある。Aにとってどのような動機づけが，これまでの，あるいは今後の進路選択や学修への意欲に影響を与えているのかを知りたいと思い，インタビューに臨んだ。

Aに調査を依頼し，調査協力への承諾が得られた後，インタビューの前には調査の目的，記録と録音の有無，プライバシー尊重の意志とその具体的な方法を説明し，インタビュー承諾書への同意のサインを依頼した。さらに，調査協力者の属性を把握するため，フェイスシートへの回答を依頼し，名前，国籍，性別，年齢，日本への来日時期，連絡先を記入してもらった。

インタビューは授業期間外に2回実施した。授業期間外と設定したのはインタビューが授業の成績とは関係のないことを明確に示すためである。一回のインタビューにつき，約1時間半程度行った。インタビューで用いた言語は主に日本語である。日本語での表出が難しいと思われる時に単語を英語で補うことが1，2度あったが，日本語での意思疎通には問題がなかった。

インタビューはICレコーダーに録音し，インタビュー後は，録音物を逐語的に書き起こしてトランスクリプトを作成し，分析に用いた。また，事前に把握していた調査協力者の状況や，インタビューの際に調査者が印象に残ったこと，気づいたことを記録したフィールドノーツも分析データとした。さらに，インタビュー後，作成したトランスクリプトおよびストーリーを調査協力者に確認してもらった。

表１　調査協力者 A

調査協力者	性別	国籍	スポーツの種類	学年	インタビュー実施
A	男性	ニュージーランド	ラグビー	2	1 回目 :2018 年 7 月 2 回目 :2019 年 1 月

4. 結果と考察

4.1　留学前から日本の高校留学までのストーリー

A は 10 歳の時にラグビーを始めた。それまでは, 競技者間の接触の度合いが強いコンタクトスポーツが嫌いだったため，サッカーをしていた。ラグビーを始めたのは，ラグビーファンであった父親の強い勧めがあったからである。父親は学生時代ラグビーをしていたが，プロは目指さず他の職業に就き，趣味としてラグビーを楽しんでいたという。また，A は 7 人兄弟の 4 番目で，他の兄弟 3 人もラグビーをしていた。小学校，中学校，高校と継続してラグビー部に所属し，将来はプロ選手になりたいという夢も持っていたが，現実的には父親のように，プロ選手ではなく趣味として続けるだろうと思っていた。

＊[1]：へえー，じゃ，ニュージーランドの高校入った時は，高校 5 年間ニュージーランドで行って，その後どうしようと思ってたの？
A：まあ，大学。
＊：ニュージーランドの大学行って，
A：はい，大学行って，その後普通の仕事。仕事する。
＊：ああ，もうラグビーしないで？
A：いや，まあ，あのー，趣味でやりますけど。
＊：あー，プロじゃなくて。
A：はい。あのー，そんなに・・・。
＊：あー，さっき，ニュージーランドでプロの選手になるの難しいって言ってたもんね。
A：そうです。

ラグビーのプロ選手になる夢を持ち続けるのは現実的ではないと, 自信をなくしたのは, ニュージーランドは世界一ラグビーが強い国であり，レベルも高いため，プロ選手になるのは容易ではないということに気づいていたからであった。

A：まあ，11 歳から結構楽しくなってきて，で，なんか，13 から 15 歳まで，あのー，なんか，はい，本気でラグビーやってて，で，15 歳なったら，・・
＊：うん

A：あの，まあ，難しいかなって思って。

＊：あ，何が？

A：あ，プロになるの。

＊：あー，ニュージーランドでね。

A：はい，〔そう〕です。

＊：あー，僕難しいなあってこと？

A：あーはい，ちょっときついかなって思って。

＊：へえー，それ，なんで？その，きついかなっていうの。

A：え，普通に。

＊：背が大きくないとか，そういうこと？

A：いや，そんなんないんすけど，普通に，難しいっす。なんか，わかってました。ラグビー，プロ選手なるの難しい，ニュージーランドで。

＊：へえー。

A：世界一やから。レベル高いし，ちょっと難しい。知ってたから。ちょっと自信なくなったです。この時。

＊：それ，なんかあったの？試合で負けたとか，メンバーレギュラーじゃなくなったとか，// けがしたとか。

A：// いや，そんなんなかったっす。普通に考えてたんです。

Aが自国でのラグビープロ選手になることを諦めかけ，自信を失っていた時，日本の高校の監督からスカウトされるという契機が訪れる。ニュージーランドへ合宿に来ていた日本の高校であるW高校の監督が偶然Aの試合を見て，W高校へ来ないかと声を掛けた。返事するまでわずか数日という限られた時間の中で，Aは家族や友人に相談し，悩む。そのW高校にはニュージーランド人の留学生T（以下，T先輩）も在籍しており，初対面で自国の高校も異なったが，合宿中T先輩から日本のことや充実している留学生活について話を聞くことができた。しかし，T先輩の話を聞いても，Aは留学に対して嫌だと感じていた。日本語ができないから怖いということ，ラグビーはニュージーランドが一番強いため本気で取り組むなら自国に残った方がいいのではないかということ，そして特に，将来の仕事への不安から留学に乗り気でなかった。

A：2日ぐらい考えて。早く決めたほうがいいって言われましたから。通訳する人と先輩に。早く決めないとビザとか，ビザ取るのめちゃかかるから。時間かかるし，行くの遅くなるし，それで学校とか遅れたら，4月に始まるから。その時に，確か，3月ぐらいでした。3月の始まるぐらいでした。全然時間がなかったです。2日以内に「はい，行きます。」って言って，あっちが，日本の人がビザとかの始めて，手続きとかやって。

＊：悩んでたの，たった 2 日とか。

A：そうです。たった 2 日, 3 日ぐらいです。はい。最初, 皆考えてました。どうするか。しかも高校, あの，ニュージーランドの高校って，単位もある。大学みたいな感じ。単位取らなあかんです。それ取れないと，なんか，将来仕事がめちゃしにくいから，それを全部考えて，その 3 日考えてたんです。そこだけ心配だったんです。帰ってきて，いい仕事できなくなるし。途中で辞めたら全然，単位足りないし，そんなに良くない。

＊：日本の高校 3 年行って，戻ってきた時に？

A：そう，また一からやり直し。大変なんですけど，なんとかなるかなって。まあ，一から。

＊：でも，やっぱり心配するのは将来のことも，ちょっとやっぱり帰ってきた時のことも心配？

A：そうそう, それが一番心配だったんです。高校終わって, まだ日本に行ったことないから高校終わったら大学も全く知らなかったし，なんか高校終わったら普通にもう，普通の仕事するか，帰るかってなる。どっちかだけって思ってました。大学全く知らな, 日本の大学とか全く知らなかったから, 最初どっちかだけって。それだけめちゃ心配だったです。

＊：それ，どっちかだったら？

A：まあ，帰って大学で一から勉強して，仕事やるって。

初めは留学することに否定的であった A だが，母親と兄弟の強い勧めや，当初反対していた父親の考えが変わったこと，友人の助言もあり，スカウトされたことをチャンスと捉え，留学を決めた。日本でラグビープロ選手を目指すためというよりは，3 年だけ留学し，珍しい経験をして帰国しようと思った。その珍しい経験はきっと良い経験になるだろうと考えた。

＊：お父さんがラグビー好きだったから中学からラグビー始めて，で，高校で 2 年目で，あとまだ 3 年あるじゃん，友達と一緒に卒業したいとか＝

A：＝はい，したかったんですけど，それも友達と相談して。なんか日本に行くチャンスがあるけど，どうしたらいいって。その友達も絶対日本に行ったほうがいいって言われました。

＊：なんでだろ？

A：なかなか無いんじゃないですか，他の国に行って。そういうチャンスが全然ないから。

＊：ニュージーランドでも珍しいの？そういう人。

A：ああ，はい。珍しいです。

さらに，以下のような語りが続く。

＊：それで，その先輩の話聞いて＝

A：＝聞いて, それでも, ちょっと嫌やなって思ってて。先輩も最初そういう全部聞いてもめちゃ嫌だったですけど, 先輩もそうだったですけど, 結局なぜかわかんないけど先輩もいいよって思って行っ

たら，めちゃ楽しかったって言ってました。で，僕は，最初は嫌って言ってないですけど，嫌，行きたくないなって考えがあって，お母さんとお父さん，お父さんもなんか，やめた方がいいんじゃないって言って，お母さんは，まあ，めちゃ行ってほしかったです。

＊：なんでだろう？お母さん日本のファンとかじゃなくて？

A：じゃなくて，珍しい。なんか，普通にいい経験になりそうって思ったから。別にずっとではなくて，なんか高校までだけ，やったから。その，嫌でも帰ってきていいよって言われたから。

＊：3年だけ？

A：3年，はい。大学も全く。その時大学も全く考えてなかったから。

＊：大学はニュージーランドに帰って来て行こうみたいな感じ？

A：はい，最初そうと思ってました。まあ，高校だけ行って，そしてなんか珍しい経験して，なんか帰って来て普通に大学に行こうと思ってたんですけど。結局，日本の大学行ってる hh

Aにとって日本の高校への留学は，偶然訪れた珍しい機会を生かし，人生を豊かにするための経験を積むのも良いだろうという，目的意識のやや曖昧なものであった。W高校の監督からは，将来もラグビーを続けたいならと誘われたが，留学はプロ選手になる夢を持ち続けるための唯一の手段であったというわけではなく，明確な将来像を伴うものではなかったと窺える。

4.2 日本の高校留学後から日本の大学進学までのストーリー

Aは15歳の時，自国の在籍していた高校を退学し，日本の高校W高校へ留学した。カルチャーショックや言葉の壁に直面しながらも，ホームステイファミリーやT先輩，ラグビー部の仲間や友人らに支えられ，留学生活は楽しかったと振り返る。当初は高校3年間留学し，卒業後は国へ帰るつもりであったが，先輩の進路状況や監督の話から，日本の大学へ進学し，ラグビーのプロ選手を目指す選択肢があることを知る。Aは高校2年生の頃から日本の大学へのスポーツ推薦を意識し始めた。高校3年生の時，実際に日本の複数の大学からAにスポーツ推薦が来て，悩んだ結果，X大学への進学を決める。まず，帰国するか否かについては，家族は帰国を望んでいた。しかし，同じニュージーランド出身のT先輩が日本の大学へ進学し帰国しなかったこと，また，国へ帰って大学へ行くよりも，日本の大学へスポーツ推薦で進学した方が家族に経済的負担を掛けないで済むことを考え，日本で進学することを決心した。さらに，複数校のうち，どの大学を進学先として選択するかについては，W高校の1学年上の先輩で，最も仲が良く，信頼していたI先輩がX大学に進学したことに影響を受け，同じ大学を選んだ。

＊：推薦来たけど，いやいや僕はニュージーランドに帰りますってならなかったの？

A：ならなかったです。家族は帰って来るって思ってたんですけど，まあ，推薦は推薦やから。まあ，3年もおったし，その上の先輩も推薦で大学行ったから，僕もちょっと気になってました。あ，

どんな感じかなと思ってたんです。

＊：そういうのもいいかな，みたいな感じ？

A：はい，そうです。

＊：最初出会った，高校生の時出会ったニュージーランド人の先輩は？

A：あ，もう卒業して大学に行った。

＊：［A 君（匿名性を守るため仮称）］が一年生の時には＝

A：＝ 3 年生でした。その人は［日本の大学名（匿名性を守るため省略）］に行きました。

＊：推薦で？

A：はい。

＊：その人もニュージーランドには帰らなかったんだね。

A：帰らなかった。

＊：それ聞いた時はどう思った？先輩帰らないんだって感じ？

A：はい，僕もどうしようって。

＊：1 年生の時から？

A：はい。

＊：監督はどんな感じだったの？推薦が来て。

A：なんか，その，日本の大学行って，プロなれるよって話しましたから。それを。

＊：その時はどれぐらい悩んだの？推薦が来てから。

A：わからないです。結構時間悩みました。その先輩と，家族と監督。最初はわからなかったです。どっちにしようかわからなかったです。まだ決めてなかったです，全然。最初日本に初めて来た時は，日本に大学ないって，高校そんなラグビー少ないんやったら，大学でもラグビー少ないんちゃうと思ったから，大学で，推薦でラグビー行くのないんちゃうと思ったから，もう帰るしかないって思ってました。あの，初めて来た時。で，2 年生の最後の方に，なんか，監督が頑張ったらスポーツ推薦もらうかも，来るかもしれないから頑張れよって言いましたから，そっからちょっと気になってました。大学のこと。どんな感じかなって。

A は，スポーツ推薦で日本の大学へ進学すれば，ラグビーを続けることができ，さらには一度諦めかけたラグビーのプロ選手になるという夢を叶える機会があると期待し，X 大学進学を決めた。家族の意見に推されて決めた高校留学とは異なり，日本の大学への進学は，はっきりと思い描く将来像へ近づくための能動的な選択であり，自己実現のための手段だと言える。また，2 人の先輩や監督が彼の進路決定における動機づけの大きな要素となっている点は，青石，佐々木（2010）が述べているように，アスリートの進路選択には「重要な他者」が強い影響を及ぼしているという研究結果を支持するものである。特に，A にとって憧れの先輩である T 先輩と，身近な目標としての I 先輩という 2 種類のモデルの存在が，A のアイデンティティ形成の手助けとなっていると思われる。これは，研究

対象は異なるが，留学生活における成長の過程に「将来的なモデル」や「身近なモデル」が関連するとした久野（2015）の主張を裏付けるものでもある。留学の目的が勉学であろうとスポーツであろうと，成長やアイデンティティ形成にモデルの存在が影響を及ぼしていると考えられる。

4.3 日本の大学進学後のストーリー

A は大学入学時からラグビーのプロ選手になることを念頭に取り組んできた。それは，厳しい練習にも意義を見出すものだったが，将来の自己実現への自信を持てずに気持ちが揺れていた。将来への不安や，自分に足りないものは何か，どうすればよいのか等悶々としていた。また，勉学においては，練習疲れを理由にあまり力を入れてこなかった。彼の動機を支えたのは，T 先輩が日本でラグビーのプロ選手として活躍していることだった。そうした中，A にとっての転機は，ワールドラグビー U20 日本代表選手として選ばれたことだった。世界の選手と交流し，自分に不足していたことがはっきりとわかったという。その結果，やる気が変わったと自覚した。それからは，将来に対して心も晴れ，また，実際に授業への出席率も高くなり，学修状況も良くなっている。

＊：それ，帰ってきてからどう？わかってから。何か変わった？
A：はい，まあ，変わりました。やる気，やる気かな。
＊：へえー。
A：はい。
＊：それはラグビー？
A：ラグビーの練習だけじゃなくて，普通の生活とか。
＊：生活？
A：自分の生活。何か，何したらもっといい選手てか，いい人なれるかって。
＊：へえー，そういうのも考えるようになったんだ。
A：はい。
＊：それ，でも難しくない？例えばどんなこと？何をしたらいい人＝
A：＝いい人っていうか，なんか，例えば，まあ，あー，いい人じゃなくて。例えば・・何やろ・・・。
［中略］
＊：その，帰ってきて，ラグビーの練習だけじゃなくて・・。ラグビーの練習が一番大事じゃないの？
A：結局，他の人に，なんか話してて，なんか，自分のせい，なんかラグビーだけじゃなくて，全部，結局ラグビーにつながってるっていう。
＊：へえー。
A：なんか，誰かが話してたから。ま，授業のことでも，なんかでラグビーとつながってるとか。
＊：へえーそうなの？
A：普通の生活とか，食べ物とか，そういうちっちゃいことは，そういうちっちゃいことしたら，もっ

と，ちゃんとしたら，なんか，授業行くのはとか，何食べてるとか，寝る時間とか，そういうちっちゃいことをちゃんとしたら，もっといいラグビー選手になる，なれる。

＊：へえー。

A：とか話してたから。

＊：そのトレーニングとかじゃなくて？

A：はい，だけじゃなくて。

A は，U20 日本代表選手に選抜された出来事について「それが自信ついた。」と評価し，それを契機に「そっから，あ，これいけるかな。プロチーム入れるかなっと思ったから。」と将来への不安がなくなったと語る。さらに，世界の選手と交流した経験が，視野を広げ，何事もラグビーにつながっているのだから日々の生活や勉学もおろそかにしてはいけないという価値観の変容をもたらした。この出来事が A にとって転機と言えるのは，経験を通してやる気が変わったという実感を持つこと，つまり出来事に対する意味づけをすることができ，それによってその後，将来への不安を払拭するための解決策として行動を起こすことができたという点にある。転機となる出来事への意味づけの過程に，A の自分に不足しているものへの気づきがあり，それが勉学への意欲を含む普段の生活を見直すことへの動機づけになったと考えられる。

4.4　A のストーリーにおける動機づけと行動の変化過程

A のストーリーの分析から，まず，高校への留学の動機づけとしては，自国におけるラグビーのプロ選手という夢への挫折，スカウトを好機とする考えや，周囲からのアドバイスが挙げられるが，それは自発的なものとは言えない。留学を貴重な機会だと捉えている語り「なかなか無いんじゃないですか，他の国に行って」や，「なんか，普通にいい経験になりそうって思ったから。」は，友人や家族の発言と自身の考え方とが混在した形で表れている。このことから，「スカウトされるのは珍しいことであり，それは良い経験をするチャンスである」というストーリーは，家族や友人といった身近なコミュニティのモデルストーリーであり，その価値観を受容して形成された動機づけであることがわかる。

一方，大学進学の動機づけとしては，スポーツ推薦によってラグビーのプロ選手という将来像に近づくことへの期待と，モデルの存在，家族の経済的負担への考慮がみられる。また，大学進学後の代表選手への選抜とその経験の中で生まれた自発的な気づきが，プロ選手になるために必要だと考える行動に影響を与え，それが学修にもプラスに作用している。Brophy（2010, p15）は，動機，特に自己実現に関わる動機は, 社会的環境の中で重要な他者によって刺激を受け, 発達するとしている。A は，ラグビーのプロ選手になるという自身が手に入れたいアイデンティティ実現への動機を，他者との相互作用の過程においてより自発的なもの，自己決定度の高いものへと変化させてきたと考察される。

表 2　動機づけと行動の関係性

	動機づけ	行動
ニュージーランドでの生活	・ラグビー経験者（趣味として）である父親 ・ニュージーランドでラグビーのプロ選手になるのは難しいという考え ・W 高校のラグビー部監督からのスカウト ・T 先輩との出会い ・家族や友人の助言 ・珍しい経験はいい経験になりそう	・ラグビーを始める ・ニュージーランドの高校でラグビー部に所属する ・ニュージーランドの高校を退学し，W 高校へ留学する
日本の高校時代	・T 先輩の日本の大学進学 ・監督からの，日本でラグビーのプロ選手を目指せるという情報 ・I 先輩の X 大学進学 ・日本の大学からのスポーツ推薦 ・家族への経済的負担を軽減したい	・日本の大学への進学に興味を持つ ・X 大学へ進学する
日本の大学時代	・T 先輩の日本でのプロ入り ・U20 代表選手への選抜 ・他国の代表選手との交流を通した自分に不足しているものへの気づき ・何事もラグビーにつながっているという考え方	・T 先輩と連絡を取り続け，プロ選手生活について情報収集する ・普段の生活を見直す ・勉学に力を入れる

5. まとめ

A のライフストーリーを見ていくことで，スポーツ留学生の進路選択における動機づけには，挫折の経験，出来事を好機と捉える視点や，重要な他者からの影響，また家族への経済的な考慮や，モデルの存在といった要素があり，それらが複雑に結びついていることが明らかになった。さらに，経験を通した他者との相互作用の過程において，アイデンティティを形成させ，自己実現への動機づけとして成長させていることもわかった。佐伯（1995）は,動機づけの基盤を「なってみたい自分づくり」にあるとしており，A の場合も，なりたい自己像が進路選択および学修への意欲にもつながっていることが見てとれる。スポーツ留学生の学修支援とキャリア支援を考えるとき，獲得したい自己像を他者との相互作用の中で発見し，成長させていくことができるという視点を持ち，彼らにそのような学びの場を提供することが必要であろう。どのような学びの場をデザインするか，その具体的な取り組みについて示唆することは今後の課題としたい。

インタビューのトランスクリプション記号一覧

//	発話の重複
＝	発話と発話の間に間隔がなく，しかも重複していない隣接の発話
・	沈黙，途切れ（「・」一つは約一秒）
ー	音の引き延ばし
hh	笑い声

〔　〕　　確定できない聞き取りの候補

［　］　　その他の注記

注

1 「*」はインタビュアーである筆者を表す。

文献

青石哲也 , 佐々木康（2010）企業スポーツチームにおけるトップアスリートのセカンドキャリア形成に関する研究ーラグビー部を有する企業に所属している選手を事例として . 生涯学習・キャリア教育研究 : 6, pp.37-45

Brophy, J.（2010）*Motivating Students to Learn*（*third ed.*）. NY: Routledge.

伊東克（2015）運動部学生の修学に対する学生競技連盟の取り組みに関する調査報告 . 大学体育 : 106, pp.60-63

木下秀明（1975）スポーツ特待生の沿革と現状ー日本の大学の場合（アマ規定の改正と学校スポーツ）. 体育の科学 : 25（2）, pp.92-95

久野弓枝 , 中谷潤子（2015）元学部留学生ライフストーリーから見る進路決定に関わる重要な要因 . 2015CAJLE Annual Conference Proceedings, pp134-141

久野弓枝（2018）自己内省の観点からのライフストーリーの再読について― 留学生の成長をサポートするビジネス日本語教育実践を目指して . 北海道大学大学院教育学研究院紀要 : 130, pp.85-98

松元秀雄 , 高橋直人（2009）外国人スポーツ留学生の日本の大学への受け入れの現状と課題ーラグビー選手に着目して . 順天堂大学スポーツ健康科学研究 : 1（2）, pp.214-224

三代純平（2014a）学習言語能力の「問題」は誰の問題か―スポーツ留学生 A のライフストーリーから . 徳山大学総合研究所紀要 : 36, pp.89-103

三代純平（2014b）セカンドキャリア形成へ向けた文化資本としての日本語―スポーツ留学生のライフストーリーから . 言語文化教育研究 : 12, pp.221-240

佐伯胖（1995）「学ぶ」ということの意味 . 岩波書店 , 東京

桜井厚（2002）インタビューの社会学ーライフストーリーの聞き方 . せりか書房 , 東京

スポーツ省（2017a）大学スポーツの振興に関するアンケート調査結果概要 .（平成 29 年 3 月 8 日 , 第 5 回大学スポーツの振興に関する検討会議配付資料）

スポーツ省（2017b）大学スポーツの振興に関する検討会議最終とりまとめ案 .（平成 29 年 3 月 8 日 , 第 5 回大学スポーツの振興に関する検討会議配付資料）

Academic Advising and Career Support for University Student Athlete
—A study of foreign student athlete—

Satomi IKEDA

Abstract

This article reports analyzes the life story of an international student athlete and an investigation of motivations toward their learning and career path. Results from interviews help identify what kinds of motivations the student has experienced and how intricately those elements relate to each other. Results indicate that he has developed his identity and self-actualization motives in the process of interaction with others through his experiences.

Keywords：career paths, motivation, life story, identity, self-actualization